せんだいメディアテークと木町通小学校との連携

五年間

二〇〇八―二〇一二

取り組み

一．木町 いろいろコレクション／木町 色のかべしんぶん ……四
二．コマ撮りアニメーションづくり ……六
三．いつもの通学路 ……八
四．木町の宝 ……十
五．震災映像アーカイブの活用 ……十二

座談会

「連携で育まれたもの」 ……十四
五年間のあゆみ ……二二

せんだいメディアテークは木町通小学校の学区内にあります。いわば、ご近所同士です。

この冊子は、二〇〇八年から五年間にわたり、メディアテークと木町通小学校が連携して取り組んださまざまな授業について報告するものです。メディアテークは美術・映像の拠点として学校教育との連携を進めていますが、木町通小学校とは特にご近所同士として、単なる出前授業や校外学習の受け入れをこえた取り組みをおこなってきました。現場の先生とスタッフが話し合いながら一緒に授業をつくり、また、子どもたちののびのびとした表現に共に驚かされてきました。

これから紹介する取り組みは、ほかの学校ではできない特別なことであるように思われるかもしれません。しかし実は、その多くが「ふだんの学校で続けていけること」を目標に取り組んだことなのです。身近になったカメラやパソコンを使いながら、身のまわりにあるものを見直し、表現やコミュニケーションの道具として映像メディアに親しむこと――そこにはめずらしいものも有名人もあまり登場しません。

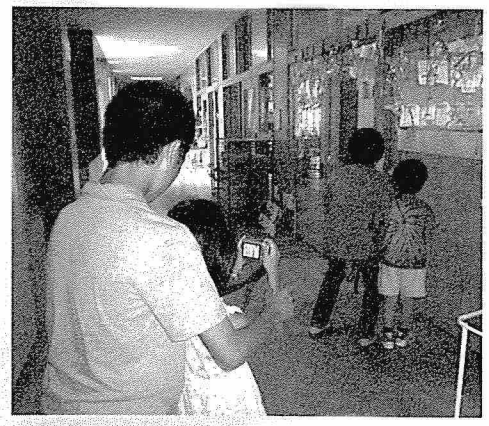
本書を通じて、地域の人や場所と学校が結びつき、子どもたちの学びを考える機会が生まれることを期待しています。

取り組み

一 木町 いろいろコレクション／木町 色のかべしんぶん（低学年）

木町通小学校での映像の授業がはじまったのは、後述する二〇〇八年にはじまる四年生でのコマ撮りアニメーションづくりからですが、二〇一〇年からは低学年でも映像表現に取り組みたいという思いから、一年生を対象として、「木町いろいろコレクション」（翌年度は「木町色のかべしんぶん」）がはじまりました。

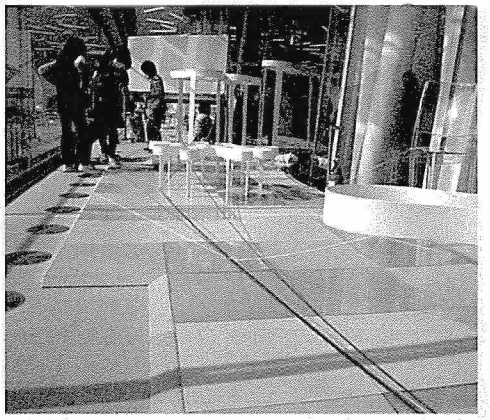
この授業は、映像にふれる前段階として、写真を撮ることを学びます。「色の楽しさを知る」「色を発見したときの、思いや考えを言葉にする」といった、図画工作の目標と結びついたねらいを、カメラ／写真という技術とむすびつけて学び、身のまわりのもののおもしろさを「色」を切り口にして撮影します。それを集めて鑑賞することで、ものをよく見ることを学ぶのです。なお、



木町 いろいろコレクション

この取り組みでは、メディアテークはカメラの貸し出しをおこなうのみで、講師派遣はしていません。

二〇〇八年、二〇〇九年には、メディアテークでの子ども向け企画の応用という側面が強く、特別な授業だった映像表現への取り組みが、このころから変わってきます。特に、二〇〇九年十月三十日にメディアテークも会場となりおこなわれた東北造形教育研究大会宮城大会を機に、教育研究会図画工作部会のなかに図工美術教育における学校と文化施設が連携事業を進めるための担当（連携部）がおかれ、先生と学芸員が話し合いをしながら相互の専門性を生かし、授業の内容を考えられるようになりました。



東北造形教育大会での様子

木町 色のかべしんぶん

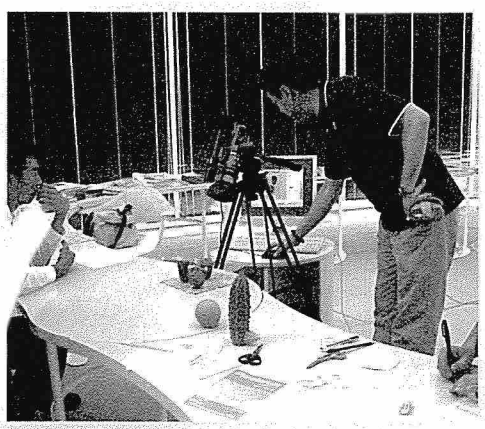
二　コマ撮りアニメーションづくり（中学年）

二〇〇八年十一月五日の五―六校時、四年二組（山崎睦子教諭）で「遊ぼう！コマ撮りマジック」と題した研究授業がおこなわれました。体育館とそこにある跳び箱やマットを素材として、四グループにわかれた児童たちが、ビデオカメラとパソコン（使用ソフト　クレイタウン）を使ってコマ撮りアニメーションをつくるというものです。市内の研究授業でカメラとパソコンを使ったアニメーションづくりがとりあげられるのははじめてで、メディアテークと木町通小学校が連携しておこなった最初の授業でもあります。

なお、これにさきがけ二〇〇七年には、仙台市内の先生を対象とした造形教育実技研修会で映像表現に関する研修がされています（主催　仙台市教育センター）。前年度の事業「こどもと映画」「子ども映画教室」などを参考としながら、館内で進めてきたワークショップを学校の授業に応用する視点で再構築しておこないました。

その研修もふまえ実践されたのが、この授業です。不特定多数の人が参加する館内でのワークショップと違い、日ごろから顔見知りの児童たちによる制作や鑑賞はのびのびとしたもので、これをきっかけに、他校からの相談も増え、学芸員が出前授業をしなくとも実施できるように貸出機材や実施マニュアルの準備が進んでいくことになります。

また、市内各校への広がりと並行して、木町通小学校では各学年を通じた映像表現の授業に取り組むようになります。二〇一二年度には全学年を通じた映像の授業がなされ、低学年では写真を使ったもの、中学年ではコマ撮りアニメーションづくり、そして、それを経た高学年では実写撮影がおこなわれるようになりました。


先生を対象とした研修

撮影の様子

鑑賞会

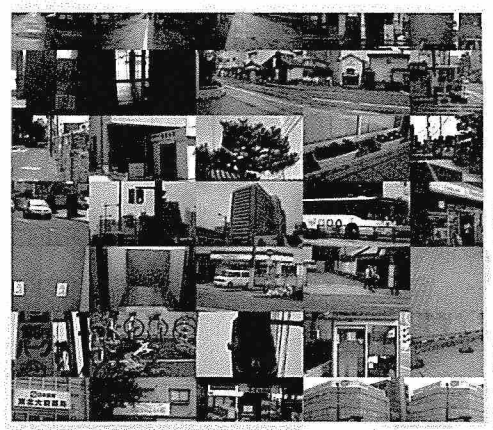
三　いつもの通学路（高学年）

メディアテークでおこなった「子どもたちと映画を見よう」（二〇〇九年六月八―十一日）のゲストだった映画監督の日向寺太郎さんが偶然にも木町通小学校の卒業生であったことをきっかけに、この取り組みは生まれました。当初は打ち合わせのためにメディアテークへ来館した機会を利用して学校で講話をするだけの案でしたが、相談の結果、講話と映像制作、そしてその鑑賞会をおこなうことにしました。

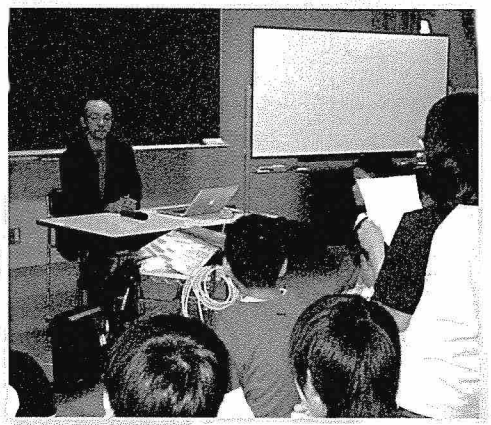
六月三十日、日向寺さんから、映画監督の仕事のことや子ども時代のこと、そして、カメラで撮影することを通じて、ものをよく見ることの大切さについてお話が六年生全員を対象にありました。その後、デジタルカメラの動画機能を使って、毎日通っている家から学校までの道のりを五秒間ずつ二十四コマ撮影してくるという宿題

が出され（六年二組のみ）、三十名の児童が一人ひとり撮影してきました。

翌週の七月七日、全員での鑑賞会では、道ばたの片隅にある花や、一緒に通う友達の表情を撮ったものなど、たしかに「いつもの通学路」なのに新鮮な驚きに満ちていること、また、言葉や文章ではなかなか表現できずにいた児童が個性的な作品を作ってきたことに、児童たちだけではなく大人たちも驚かされました。この経験が、次ページの「木町の宝」へと結びつくのです。



子どもたちの作品の一部（静止画）



日向寺さんによる講話

四 木町の宝

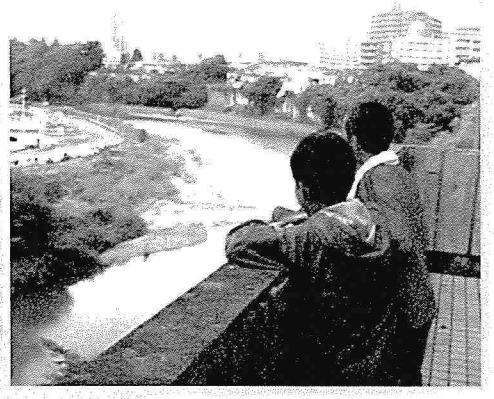
「いつもの通学路」に着想を得て、それまで続けられていた「木町を知り、ふれあい、学び、話し、好きになる」学習に映像を取り入れ発展させたのが、二〇一〇年からはじまった「木町の宝」です。

六年生によるこの授業は、「題材を通じて地域をよく見ること」「自分の考えを言葉にすること」「考えを映像化し、伝える醍醐味を経験すること」また「グループワークや創作活動における発想の広がりを実感すること」をねらいとして、児童たちが暮らす地域を見つめ思い出の場所や好きなことを一分間の映画として表現しようとするものです。

導入部ではメディアテークの職員が映像表現の基本を教えますが、それ以後は六年生にいたるまでに経験する地域学習等のノウハウを生かして制作します。「自分にとって木町の宝はなにか」という問いを、まずは日ごろ慣れている作文で表現し、そこからストーリーを練り、撮影場所の下見やリハーサルをしながら進めます。映像には自分自身が出演しなければならないため、必然的に撮影はグループワークになります。また、ドラマ仕立てにする児童も多く、同級生や地域の人たちに出演依頼や演技指導をするものもあり、作品づくりを通じて自然に他者とのコミュニケーションがはかられるようになっています。

作品の完成後、保護者やメディアテークなど大人たちも出席する上映会がおこなわれます。自分自身や友達が映っている作品ばかりなので会場が沸くことはもちろん、洞察の深さや構成力には大人たちも感心させられます。なお、全員作品はＤＶＤにまとめられ卒業記念制作として子どもたちの手に渡されます。

発表会



作品の一コマ

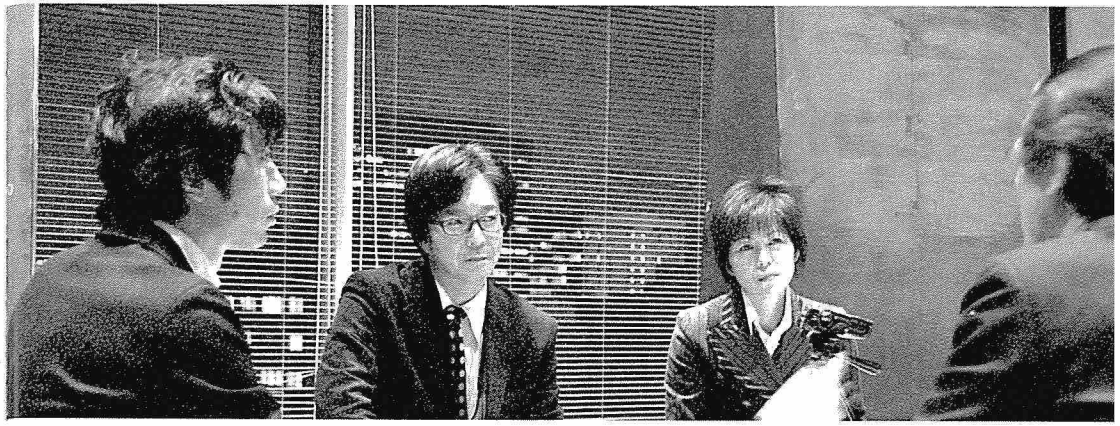
五 震災映像アーカイブの活用

二〇一二年から、東日本大震災に関する映像アーカイブ事業「3がつ11にちをわすれないためにセンター」で集めた映像記録の活用にむけての取り組みがはじまりました。

単に防災教育の資料として使うのではなく、幅広い観点からこの映像アーカイブを使うことはできないか、そのためには何が必要かというメディアテークからの問いかけにこたえ、先生たちに資料を見てもらい、感想や授業への取り入れ方について議論をしています。

たとえば、これまで撮られた資料には、さまざまな地域で仕事をしている方々に震災時の様子を聞いたものがあり、それらのなかには、社会科で宮城県内の地域の特徴を学ぶ過程でいかせるものがあるということがわかってきました。また、職業に焦点をあてて考えることで、自分づくり教育にいかせるのではないかという予想も立てられています。映像資料の内容や授業との関連をわかりやすく説明するキーワードが必要ではないかということも見えてきました。こういった発見は授業に直接携わっている先生でなければできないことで、資料活用の観点から重要な示唆となっています。

座談会「連携で育まれたもの」



座談会「連携で育まれたもの」

熊谷英之（木町通小学校　教務主任）
山崎睦子（木町通小学校　教諭）
山口哲男（楽学プロジェクト委員会　委員長）
聞き手　小川直人（せんだいメディアテーク　学芸員）

五年間の取り組みを振り返るために、一緒に授業に取り組んできた木町通小学校の熊谷さん、山崎さんに加え、自分づくり教育の一環としてさまざまなプロが学校でお話をする「楽学プロジェクト」委員長の山口哲男さんにも参加していただきました。

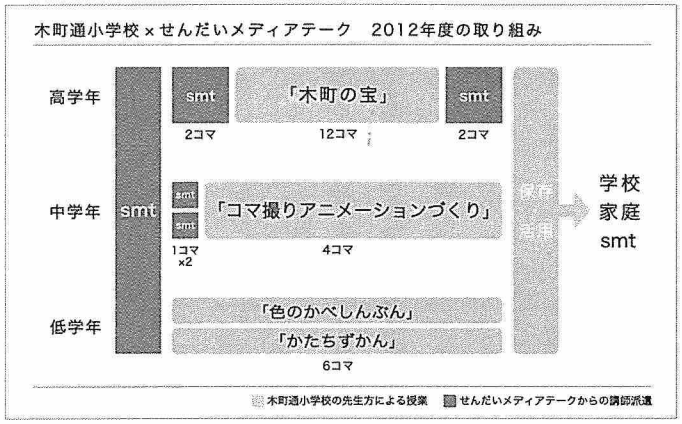
子どもたちの変化

小川　木町通小学校とメディアテークはご近所同士ということもあり、打ち合わせや発表会など頻繁に学校へ足を運び、子どもたちと会う機会も多かったように思います。それでも、授業以外の子どもたちの様子はわからないので、これまでの取り組みで子どもたちがどう変わったのか気になっていたのですが、普段接している先生から見て、この取り組みを通じて一番子どもたちが変わったなと思うところはなんですか。

山崎　ひとつは、授業のなかで気軽に映像機器を使って記録や発表をできるようになったことです。私たちがグラフや写真を使ったりするのと同じように子どもたちは映像も使うようになりました。それともうひとつ、自主制作で映画を作ったりする子どもたちが現れたことですね。

熊谷　学校ではメディアリテラシー教育が課題のひとつとしてあるのですが、低学年の写真にはじまり高学年で動画を扱うにいたるまで系統立てて学ぶことで、映像を活用できるようになったのが良かったと思います。こちらから子どもたちに指示しなくとも、カメラを使ってこういうことをしてみようと意識が向くようになってきました。

小川　全学年を通してできるようになったのは、二〇一二年度になってからでしたね。最初のころを思い出してみると、メディアテークでやっているワークショップを授業にどう持ち込むかという発想でした。でも、それだと学校での学習全体のなかで位置づけが難しいという悩みもありました。それが、木町通小学校では継続して連携することで、子どもたちにとって本当に必要な学びに近づいたという実感があります。※図一参照



（図 1）

「木町の宝」から見えるもの

山口　私が、まちづくりのなかで考えていたのは、さまざまな人から見た地域のよさや大事なところをとらえて自分なりに表現していくことが、この地域に生きて、ここを好きだなと思う第一歩になるということです。子どもたちそれぞれが撮った「木町の宝」を見たときに、これだ！と思いました。

山崎　学区内にある春日神社を題材に選んでいる子どもが何人もいますが、お参りしたり、遊び場にしていたり、子どもそれぞれの視点でとらえていておもしろいんです。それと、あのおもしろさはみんなで見る発表会なんです。作品をつくった友達のことをよく知っているからこそ、撮影してきた木町の宝が「こいつならこれを選ぶよね！」とわかる。たった一分の映画ですが、子どもたちは自分の裸の姿をみてもらうことになるので、とても恥ずかしい反面、自分の本当の姿をみてもらえるうれしさもある。

山口　北四番丁のビルのミラーガラスをとりあげた女の子がいましたね。通学途中にそこで髪型を整える乙女心が伝わってきました。男の子もちらっと気にしていたりね。ところで、彼らは「どうして好きなのか」は作品中で言いませんね。理由は必要ないのかも。自分にとって大事な思い出が映っていれば、それで良いのだと。

山崎　説明をすると映像にする意味がなくなってしまうんです。それなら作文をかけばよいので。理解も、人によっては誤解もするかもしれないけれど、映像を通して思いをやりとりする。そもそも、子どもたち同士の共感がすごい。「そうそう、これこれ」

熊谷英之

小川直人

という感じです。

それに、マイクはいろんな音を拾うので、普段耳に残らない雑踏の音が入っています。遊んでいるときは友達の声しか聞こえない。遊んでいるときにどれだけ集中しているのか、なんてことを見終わった後に話していました。

山口　同じ場所を取り上げている子どもたちも、それぞれ違うんですね。ほんの少し離れたところで、全然違う思い出を持っている。私たちが子どものころもそうだったんだろうなと思い出しました。それと、こう言ってはなんですが、台詞は上手ではないですね（笑）。でも、「これは先生が教えたのではなく、自分たちで考えて発した言葉なんだろうな」と分かります。上手ではないけれど、自分らしい。この朴訥とした声が映像に合っていましたね。上手下手ではなく、子どもたちが試行錯誤しながら、ひとつの形にまとめあげたということが学びとして大事。

学ぶのは技術ではない

小川　山口さんがおっしゃった「先生は教えていないのかも」というところで、先生お二人にうかがいたいことがあります。コマ撮りアニメーションづくりなどは、上手に見える技術はいくらでも教えられるのですが、それよりはみんながのびのびできることを重視して授業を組み立ててきました。今更なのですが、上手にできるように教えた方が良かったのでしょうか。つまり、私たちに期待されているのは映像の専門性

山口哲男

山崎睦子

であるとは思うのですが……。

山崎　ハウツーになったら意味がないです。下手でもよいので、命がないものが生き物のように動くこと、ありえない動きが表現できること、そこに気がついてもらうのが子どもの可能性をひろげる重要なポイントでした。木町の宝でも、基本的なことを教えてもらったあとは、自分がなぜこれを宝物と思うのか、言葉で説明しなくてもわかるようにするにはどう表現したらよいか、というお題だけを与えています。

そんななか、子どもたちが作っている最中に「ドラマって上手だよね」と言うんです。場面や編集だけでちゃんと伝わるように作っているなあと。今まで意識もしていなかった見方で見るようになっただけですごいと思いました。

小川　いま、技術の話がでたので、もうひとつ質問を。この取り組みがはじまったころに併行してやっていた教育センターの実技研修会で、「評価の仕方がむずかしいので取り組みづらいのではないか」という意見を時折いただきました。たしかに、一人ひとりの子どもたちをどう評価するのか、この授業そのものどう評価するのか、ご苦労なさったところはありますか。

山崎　まず「興味関心の態度」「鑑賞する力」は、これで評価できると思います。時間も忘れて取り組むし、友達の作品もよく見る。実のところ、技術の部分は指導要領にないので、上手下手を評価しなくても良いんです。それに、図工の場合、「思ったようにできない」ことが負担になって苦手とする子どもが結構います。コマ撮りアニメーションの場合には、何度もやり直しをできて、そういう心配が少ない題材でした。

ほかの学校でもできる

小川　メディアテークは、博物館や科学館のように立派な展示資料があるわけではありません。学年全員が集まれる場所があるわけでもないので、見学に来る学校もあまりなく、こちらから学校に出前するプログラムもなかなか難しい。でも特別なことができるはずもないからこそ、今回の取り組みは他の学校でも可能だと考えています。そのためのポイントがあるとしたら何でしょう？

山崎　教科書にもカメラを使った作品はあるので、内容としてはやりやすいと思います。小学校の場合、小さな子どもたちが対象になるので、同じ機材環境がそろっていてスムーズに導入がおこなえるなど、入口を整えることは大事です。あとは、学年の先生みんなが「おもしろいね」と言ってくれるメンバーかどうか（笑）。

熊谷　もちろん、ほかの学校でもできると思います。

でも、学校というのは前年度踏襲というのが多い。そこに新しいもの持ち込むのは正直難しいことではあって、それを変えるためには、いま山崎さんが言ったように入口を整えることと、こういった取り組みが子どもたちにとって大事なんだといろいろな方面から訴えていくことでしょう。

小川　メディアテークをもう一つつくるのは無理なのですが、それぞれの地域にもこれくらいのことはできる人や場がありそうな気もします。楽学プロジェクトをなさってきた山口さんは詳しいのでは？

山口　学校のなかで学校のことを完結するというのはもう古い考えで、たとえば、専門的なことは専門の人にまかせて、先生たちは子どもたちを導くこと、その専門性を発揮してもらいたいと思ってい

ます。メディアテークをたくさんつくるようなことよりも、こうした取り組みを理解してくれる地域の大人たちが、それぞれの地域で関わっていけるようにすることだと思います。地域には結構いろいろ持っている大人がいますよ。学校があって地域があるわけではなく、地域のなかに学校があるわけですから。まず第一に、保護者のみなさんの存在があるわけですし。

先生の力

山崎　コマ撮りアニメーションの研修会に、保護者の人たちも参加できてもよいですね。何度か授業を見ている方のなかにはやってみたいという方もいるでしょう。

私が日々思うことのひとつに、地域と学校と子どもがいて、地域と学校だけだったり、地域と子どもだけだったりするとき、学校は、先生はどう関わるとよいのかなと。今回の取り組みでは、メディアテークが子どもたちとの関係だけではなく、学校の意図を汲み取ろうとしてくれたことをうれしく思いました。でも、最初に相談したときには「協力できることはいろいろ考えられると思いますが、何をやりたいかがまず大事です」と言われてドキッとしましたね。地域学習でも、丸投げではなくて、こちらの意図をしっかり伝える先生がいないと始まらない。

山口　そうです。誰が主体になり、子どもたちの学びを支えていけるのか。いわゆるプロに学ぶというのは意味あることですが、子どもがどう学んでいけばよいかを知っているのは先生たちで、先生がまず第一のプロなんです。そうすることで連携が本当の意味をなしていくと思います。

小川　私たちメディアテークが教えることのプロではないということは、この取り組みが始まった当初

から自覚していましたので、その部分については先生たちにきちんと入ってもらって、自分たちもそれを見て学ぶことができました。続けてきた甲斐はそこにもありました。

熊谷　授業の前、子どもたちに「メディアテークの人がね……」といろいろ話しています。そこがあるかないかが大きい。私たち教員が、外から来た人たちと子どもたちを学習の流れの中でつないでいく。終わってからでも良いと思います。子どもたちと一緒に反芻することで、学びの深まりがでると思います。

山口　先生がすべてをつくるわけではなくて、まわりの力を集めて完成させる指揮者であってほしい。そのときに参考書を探してきても良いし、メディアテークを持ってきてもよい、地域の人を探して頼んでも良い。それらをコーディネートして進んでいくのが先生。

山崎　小学校の先生は、各学年・各教科のことをすべて分かっています。だから、どの単元と繋がるのかわかるし、そこをコーディネートできる。実はそれほど難しいことではないと思います。

「木町の宝」では、六年生になるまで培った地域学習のつながりを活かして、子どもたち自身が撮影場所の交渉をしています。そういう積み重ねがあるからこそできたこととも言えるし、下学年でやってきたことを活かす機会だったとも言えます。

二〇一三年三月　於　せんだいメディアテーク

五年間のあゆみ

二〇〇八年度

コマ撮りアニメーションの授業について木町通小学校からメディアテークへ相談される。

「遊ぼう！コマ撮りマジック」（仙台市小学校教育研究会図画工作部会　研究授業）　四年生。

二〇〇九年度

東北造形教育研究大会宮城大会に際し、図画工作部会に連携部がつくられる。

「どんどんつくろう」二年生（東北造形教育研究大会　研究授業）
「おどれ！ぼくらのイメージ」六年生　（同大会　研究授業）
「いつもの通学路」　六年生
（展覧会鑑賞）「光の航跡　高橋匡太」　六年生

二〇一〇年度

メディアテークと連携した映像表現に関する授業を図画工作科の目標に即しておこなうようになる。

「木町いろいろコレクション」　一年生
「木町のたからもの」　四年生
「木町の宝」　六年生

二〇一一年度

メディアテークと連携しておこなう映像表現に関する授業を「自分づくり教育」に位置づける。

「木町　色のかべしんぶん」　一年生
「コマ撮りアニメーションづくり」　三年生　四年生
「木町の宝」　六年生

二〇一二年度

すべての学年を通じて映像表現に関する授業をおこない、下学年で授業経験がある学年に対応した授業内容づくりが進む。

「木町　色のかべしんぶん」　一年生
「木町　かたちのかべしんぶん」二年生
「コマ撮りアニメーションづくり」　三年生　四年生
「映像で伝えよう」　五年生
「木町の宝」六年生
震災アーカイブの活用（教員との検討会）

せんだいメディアテークと木町通小学校との連携五年間
二〇〇八―二〇一二

編集・発行　せんだいメディアテーク
〒九八〇―〇八二一
宮城県仙台市青葉区春日町二―一
TEL　〇二二―七一三―三一七一
FAX　〇二二―七一三―四四八二
www.smt.jp
office@smt.city.sendai.jp

デザイン　小野朋浩　／　小さな街
印刷・製本　カガワ印刷

発行日　二〇一三年三月

せんだいメディアテーク
sendai mediatheque